

乳幼児の父親・母親における 子ども誕生後の生きがい感の変化

——生きがい感に対する考え方と生きがいプロセスからの検討——

熊 野 道 子

要約：本研究の目的は、乳幼児の父母を対象として、子ども誕生後の生きがい感の変化と、その要因を生きがい感に対する考え方と生きがい感に至るプロセスの観点から明らかにすることである。乳幼児の親 859 名（父親 422 名、母親 437 名）を対象に web 調査を行い、専業主婦家庭・共働き家庭という 2 つの家族形態別の父親と母親の 4 群に分けて検討した。その結果、専業主婦・母親は、子ども誕生後に生きがい感が高まる者の割合が最も大きく、共働き母親は子ども誕生後に生きがい感が低下する者の割合が最も大きかった。専業主婦・母親は子どもの成長を 10 点満点の生きがい感とする者の割合が最も大きく、子ども出産前に時間的見通しを持ち難かった専業主婦・母親において、子どもの成長過程の中で、過去の出来事を意味づけることにより生きがい感に至ると考えられる。また、共働き母親は仕事と子育てが両立困難であるネガティブ状況への受容や対処が十分でなかったり、ポジティブ状況への没頭が低下したりして、10 点満点の生きがい感で出現率の高い自分の人生実現や毎日の充実が満たされにくくなっていることと関係することが考察された。

はじめに

乳幼児をもつ親は、子どもが生きがい対象であり、子育てに喜びを感じる者が 8 割を超えている（内閣府，2005）。神谷（1966）でも、生きがい感をもたらす対象として、さまざまな生きがい対象があげられているが、中でも特に「子どもを育てること」は生きがい感をもたらすための多様な欲求を満たすものであると述べている。このように、乳幼児をもつ親にとって、子どもは生きがい感の大切な源である。

しかしながら、乳幼児をもつ親は、「親」「職業人」「夫（妻）」「地域人」といった多くの役割をこなしており、ストレスフルな状態に陥りやすい（福丸，2000）。子育ては「親として」の生きがいの源泉であるが、「職業人として」の生きがい感を失うことになることも考えられる。

ところで、母親は子育てに専念し、父親は外で働くという生き方が主流だった時代とは異なり、近年は個人の生き方が多様化している。母親は、育児に専念することではアイデンティティを支えきれず、「個人として」生きることを志向する傾向が強まっている（百

瀬, 2009; 小野田, 2013; 柏木・永久, 1999; 永久・柏木, 2000)。共働き母親は職業人としての仕事を通じて「個人として」生きることを実現していく可能性が高いが, 専業主婦の母親は職業人役割がないので, 何か他のものを見出さなければならず, 「個人として」生きることを実現しにくいと考えられる。実際に, 専業主婦の母親は個として生きる志向が強いほど, 現状で個として生きることが実現できず, 自尊感情が低くなっている(百瀬, 2009)。

一方, 父親では, 子育てへの参加が社会的にも求められるようになってきているが, 長時間労働など勤務状況に変化はみられず, 母親と同様に仕事と子育ての両立への葛藤に悩む者もいると考えられる。実際のところ, 2014年の調査(ベネッセ教育総合研究所, 2015)では, 就学前の子どもがいる父親のうち58%が家事・育児に今以上にかかわりたいと回答しており, 2005年の調査における48%よりも増加している。しかし, 2005年から2014年で父親の家事・育児へのかかわりの実態は, 大きくは変化していないことが示されている(ベネッセ教育総合研究所, 2015)。ワーク・ライフ・バランスの理想と現実に関する調査(厚生労働省, 2009)でも, 未就学の子どもをもつ父親も母親もともに, 理想としては家事・育児と仕事の両方を重視したいと考えていても(正社員父親: 58%, 正社員母親: 52%), 特に父親では現実的には仕事を重視している者が多いこと(正社員父親: 74%, 正社員母親: 31%)が示されている。

このように, 母親も父親も自分の理想とする生き方を実現することが難しくなってい

る。しかしながら, 自分の理想とする生き方を実現することは生きがい感に深く関わるであろう。そこで, 本研究では, 乳幼児をもつ父親・母親の生きがい感が子ども誕生後にいかに変化するかを調査し, その要因を生きがい感に対する考え方や生きがい感をいかに形成するか心理プロセスの観点から検討する。職業の有無で生き方や生活様式が大きく異なり, 生きがい感に対する考え方が異なると考えられるので, 性別(父親・母親)に家族形態(専業主婦家庭・共働き家庭)の要因を加えて4群に分類する。そして, 専業主婦家庭の父親(以下, 専業・父親と記す), 共働き家庭の父親(以下, 共働き父親と記す), 専業主婦家庭の母親(以下, 専業・母親と記す), 共働き家庭の母親(以下, 共働き母親と記す)で, 生きがい感の考え方と生きがい感を形成する心理プロセスがいかに異なるかを明らかにする。

生きがい感を形成する心理プロセスに焦点を当てた研究の成果として, 時間と状況の2次元からみた生きがい形成の価値過程モデル(熊野, 2012)(Figure 1, 以下, 生きがい形成モデルという)が作成されている。このモデルの基本構造は, 生きがい形成で重要と考えられる時間(過去・現在・未来)と状況(ポジティブ状況・ネガティブ状況)の2次元を設定し, さまざまなライフイベント(人生の出来事)から, 生きがい対象(生きがいをもたらず対象)となるものが選別され, 生きがいプロセス(生きがいを感じている精神状態になるためのプロセス)を経て, 生きがい状態(生きがいを感じている精神状態)を形成する心理プロセスを示している。生きがいプロセスには時間と状況の2次元が導入

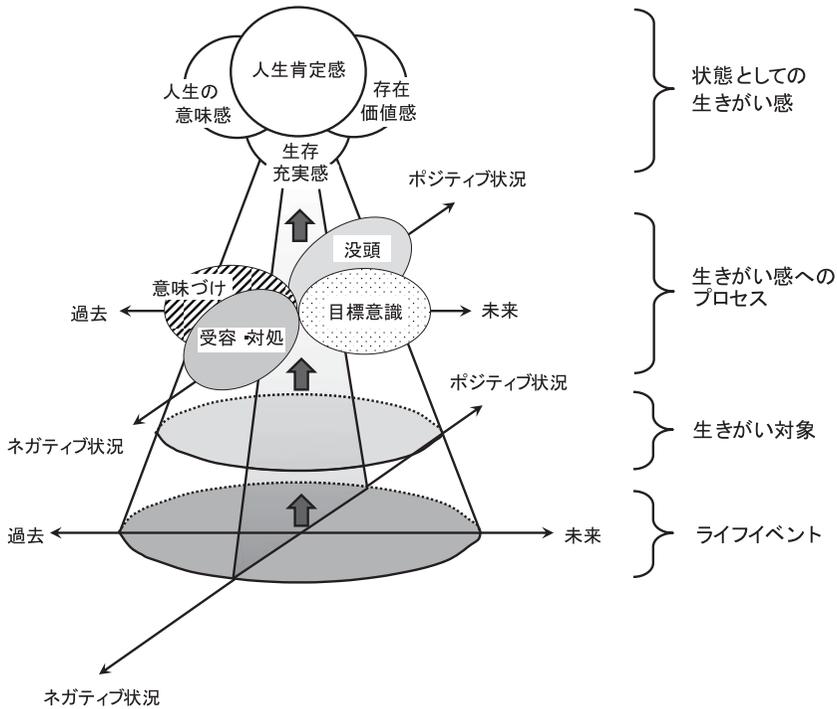


Figure 1 時間と状況の2次元からみた生きがい形成の価値過程モデル (熊野, 2013 より転載)

され、過去には意味づけ、未来には目標意識、ポジティブ状況には没頭、ネガティブ状況には受容・対処が配置されている。生きがい状態は、人生肯定感が核として頂点に配置され、次に中心的な要素である存在価値感、人生の意味感、生存充実感が人生肯定感の周囲に配置されている。

そして、このモデルに沿って、生きがいプロセス尺度と生きがい状態尺度が作成され、その信頼性と妥当性が確認されている(熊野, 2013)。本研究では、生きがいプロセス尺度と生きがい状態尺度を用いる。また、どのように生きがい感を考えているかを、10点満点の生きがい感の自由記述を用いて尋ねる。

以上のように、本研究の目的は、乳幼児をもつ父親・母親の子ども誕生後の生きがい感

の変化を、どのように生きがい感を考え、生きがい感を形成するかの心理プロセスに着目して、性別と家族形態の4群での相違を検討することにより実証的に明らかにすることである。具体的には、性別と家族形態の4群について、子ども誕生後の生きがい感の変化を10点満点の生きがい感に対する考え方、および、生きがい形成モデルでの生きがいプロセスと生きがい状態の観点から検討する。

方法

調査方法

調査会社の登録モニターを対象としたweb調査を2013年8月に実施した。協力者は就学前の子どもがいる親859名(父親

422名, 母親437名)であった。父親は有職者に限定し, 母親が無職である場合は, 専業主婦家庭とし, 母親が有職である場合を共働き家庭とした。共働き父親224名(38.9±5.3才), 専業・父親198名(38.7±4.9才), 共働き母親228名(34.9±5.1才), 専業・母親209名(34.2±4.7才)であった。

調査項目

生きがい感(現在・子どもの誕生前) 現在の生きがい感は, 「現在, あなたはどの程度生きがいを感じていますか。」と尋ね, 子どもの誕生前の生きがい感は, 「子どもが誕生する前には, あなたはどの程度生きがいを感じていましたか。」と尋ねた。それぞれ, 「とても生きがいを感じている(感じていた)」を10点, 「まったく生きがいを感じていない(感じていなかった)」を0点とすると, 何点くらいになると思うかを尋ねた。

生きがいプロセス尺度 生きがい形成モデルでの生きがいプロセスを測定するために, 熊野(2013)で信頼性・妥当性が確認されている15項目の生きがいプロセス尺度を用いた。生きがいプロセス尺度は, 過去の意味づけ, 未来の目標意識, ポジティブ状況の没頭, ネガティブ状況の受容, ネガティブ状況の対処の5つの下位尺度から構成され, 各項目に「まったく当てはまらない(1)」から「とても当てはまる(6)」までの6件法で回答を求めた。

生きがい状態尺度 生きがい形成モデルでの生きがい状態を測定するために, 熊野(2013)で信頼性・妥当性が確認されている12項目の生きがい状態尺度を用いた。生きがい状態尺度は, 人生肯定感, 存在価値感,

人生の意味感, 生存充実感の4つの下位尺度から構成され, 各項目に「まったく当てはまらない(1)」から「とても当てはまる(6)」までの6件法で回答を求めた。

10点満点の生きがい感 生きがい感に対する考え方を明らかにするために, 現在の生きがい感と子ども誕生前の生きがい感を尋ねた後で, 「前の質問で, あなたが10点満点中の10点の生きがいを感じるができる人生とはどのような人生でしょうか。自由に記述してください。」と10点満点の生きがい感を感じる人生について自由記述を求めた。

なお, 本研究のデータは, 「乳幼児をもつ親の育児感情と自分の役割配分と幸福感の関連(熊野 2017)」に関する研究と合わせて取得している。熊野(2017)の研究では, 幸福感, 自分の役割配分, 育児感情のデータについて報告している。

分析方法

本研究の数値データ(生きがい感(現在・子どもの誕生前), 生きがいプロセス, 生きがい状態)の統計解析については, IBM SPSS Statistics ver. 22.0, IBM SPSS Amos ver. 19.0を使用した。

本研究の記述データ(「10点満点の生きがい感」の記述内容)の統計解析については, KH-Coder ver.2.Beta.31(樋口, 2014)を用いて分析を行った。KH-Coder ver.2.Beta.31では, まず出現回数順に抽出語を検討し, 次に, たとえば, 「子供」と「子ども」と「こども」と「子」のように別々に抽出されているが同様の意味を持つと考えられる語をまとめるcodingを行った。そして, codingについて階層的クラスタ分析を行い,

デンドログラムを作成し、coding をクラスターに分類した。各クラスターについて、記述を行った人数を性別と家族形態の4群について集計を行い、 χ^2 検定を行った。

倫理的配慮

調査は無記名式で行い、調査目的を最初に説明した。そして、調査が強制でなく、自由に拒否でき、得られたデータは統計的に処理されることや研究以外に使用しないことを説明した。また、調査会社に調査対象者の個人情報保護されることを確認した。

結果

現在と子ども誕生前の生きがい感

現在と子ども誕生前の生きがい感について、性別と家族形態の4群における平均値

を求め、Table 1に示す。性別（父親・母親）と家族形態（専業・共働き）の2要因分散分析を行った結果、現在の生きがい感では統計的有意差は認められなかったが、子ども誕生前の生きがい感では1次の交互作用が認められ ($F(1,855) = 5.2, p < .05, \eta^2 = .006$)、母親において、専業・母親は共働き母親に比べ、子ども誕生前の生きがい感は低かった。

子ども誕生後の生きがい感の変化

子ども誕生前から現在の生きがい感への変化をみるために、子ども誕生前より現在の生きがい感が上昇する場合、変化のない場合、低下する場合に分けて、該当する人数を、性別と家族形態の4群について Table 2に示す。4群のいずれの群でも、子ども誕生前より現在の生きがい感が上昇した者の割合が最

Table 1 4群における現在・子ども誕生前の生きがい感

		共働き 父親	専業・ 父親	共働き 母親	専業・ 母親	全体	2要因分散分析結果 性別（父親・母親）× 家族形態（共働き・専業）
現在	<i>M</i>	7.46	7.69	7.60	7.55	7.57	
	(<i>SD</i>)	(2.12)	(1.93)	(1.98)	(2.04)	(2.02)	
子ども 誕生前	<i>M</i>	6.68	6.79	6.96	6.47	6.73	1次の交互作用
	(<i>SD</i>)	(1.98)	(1.87)	(1.92)	(1.91)	(1.93)	$F(1,855) = 5.2, p < .05, \eta^2 = .006$

Table 2 4群における子ども誕生前と比較しての現在の生きがい感の変化者数

		共働き父親	専業・父親	共働き母親	専業・母親	全体
低下	<i>n</i>	16	14	33	19	82
	割合 (<i>n</i> /各群の人数)	(7%)	(7%)	(14%)	(9%)	(10%)
	調整済み残差	-1.4	-1.4	3.0**	-0.3	
変化なし	<i>n</i>	101	74	86	61	322
	割合 (<i>n</i> /各群の人数)	(45%)	(37%)	(38%)	(29%)	(37%)
	調整済み残差	2.7**	0.0	0.1	-2.8**	
上昇	<i>n</i>	107	110	109	129	455
	割合 (<i>n</i> /各群の人数)	(48%)	(56%)	(48%)	(62%)	(53%)
	調整済み残差	-1.8 ⁺	0.8	-1.8 ⁺	2.9**	

** $p < .01$, ⁺ $p < .10$

も大きく (48-62%), 次に変化のない者の割合が大きく (29-45%), 低下した者の割合は少なかった (7-14%)。

性別と家族形態の4群における子ども誕生前と現在での生きがい感の変化する者の割合について、 χ^2 検定を行った結果、4群において子ども誕生前より現在の生きがい感が上昇する場合、変化のない場合、低下する場合の比率が統計的に有意に異なっていた ($\chi^2(6) = 21.3, p < .01$)。

残差分析を行った結果、共働き母親は、子ども誕生前より現在の生きがい感が低下する者の割合が4群の中で最も大きく (14%, 調整済み残差 = 3.0, $p < .01$)、専業・母親は、子ども誕生前より現在の生きがい感が上昇する者の割合が4群の中で最も大きかった (62%, 調整済み残差 = 2.9, $p < .01$)。また、子ども誕生前と現在での生きがい感の変化がない場合は専業・母親での割合が小さく (29%, 調整済み残差 = -2.8, $p < .01$)、共働き父親での割合が大きかった (45%, 調整済み残差 = 2.7, $p < .01$)。なお、共働き父親と共働き母親では、子ども誕生前より現在の生きがい感が上昇する者の割合が小さい傾向がみられた (ともに48%, 調整済み残差 = -1.8, $p < .10$)。

生きがいプロセスと生きがい状態

生きがいプロセス尺度は、Amosを用いた確認的因子分析により3項目ずつの5因子での適合度は概ね満足のいくものであり ($GFI = .936, AGFI = .903, CFI = .962, RMSEA = .069$)、5因子であることが確認された。生きがい状態尺度は、Amosを用いた確認的因子分析により3項目ずつの4因子

での適合度は概ね満足のいくものであり ($GFI = .934, AGFI = .892, CFI = .975, RMSEA = .084$)、4因子であることが確認された。両尺度とも、3項目ずつ合算し平均を求め、各下位尺度得点とした (Table 3)。なお、生きがい状態尺度は各下位尺度間の相関が.76-.88と高かったため、全項目の平均を求め、生きがい状態 (合計) の得点とした。

各下位尺度について、性別 (父親・母親) × 家族形態 (専業・共働き) の2要因分散分析を行った。その結果、生きがいプロセス尺度では、過去の意味づけ以外の下位尺度で、性別の主効果が認められ (未来の目標意識: $F(1,855) = 12.0, p < .01, \eta^2 = .014$; ポジティブ状況の没頭: $F(1,855) = 43.2, p < .001, \eta^2 = .048$; ネガティブ状況の受容: $F(1,855) = 7.1, p < .01, \eta^2 = .008$; ネガティブ状況の対処: $F(1,855) = 5.8, p < .05, \eta^2 = .007$)、父親が母親より高かった。

生きがい状態尺度の各下位尺度と生きがい状態 (合計) では、主効果も交互作用も統計的に有意でなく、4群間に統計的有意差は認められなかった。現在の生きがい感に、4群間の統計的有意差がみられないことと一致した結果であった。

10点満点の生きがい感の記述内容

4群全体の傾向 まず、10点満点の生きがい感の記述内容について、出現回数 (のべ回数であり、人数ではないので、1人の回答で出現回数が2回以上となる場合がある) により語を抽出した。出現回数が20回以上あった抽出語を示した結果がTable 4である。100回以上記述された抽出語は、「人生」

Table 3 4群における生きがいプロセス・生きがい状態尺度の平均値

	共働き 父親	専業・ 父親	共働き 母親	専業・ 母親	全体	2要因分散分析結果 性別(父親・母親)× 家族形態(共働き・専業)
生きがいプロセス尺度						
過去の意味づけ	<i>M</i> 4.40 (<i>SD</i>) (0.89)	4.40 (0.91)	4.38 (0.95)	4.29 (0.98)	4.37 (0.93)	
未来の目標意識	<i>M</i> 3.93 (<i>SD</i>) (1.04)	3.86 (0.98)	3.70 (1.07)	3.59 (1.03)	3.77 (1.04)	$F(1,855) = 12.0, p < .01, \eta^2 = .014$ 父親>母親
ポジティブ状況の没頭	<i>M</i> 4.10 (<i>SD</i>) (1.01)	4.01 (0.94)	3.64 (1.05)	3.56 (1.05)	3.83 (1.04)	$F(1,855) = 43.2, p < .001, \eta^2 = .048$ 父親>母親
ネガティブ状況の受容	<i>M</i> 4.26 (<i>SD</i>) (0.93)	4.25 (0.89)	4.11 (0.87)	4.08 (0.94)	4.18 (0.91)	$F(1,855) = 7.1, p < .01, \eta^2 = .008$ 父親>母親
ネガティブ状況の対処	<i>M</i> 4.19 (<i>SD</i>) (1.03)	4.22 (0.91)	4.13 (0.90)	3.96 (1.01)	4.13 (0.97)	$F(1,855) = 5.8, p < .05, \eta^2 = .007$ 父親>母親
生きがい状態尺度						
人生肯定感	<i>M</i> 3.81 (<i>SD</i>) (1.10)	3.77 (0.97)	3.67 (1.03)	3.72 (1.09)	3.74 (1.05)	
人生の意味感	<i>M</i> 3.84 (<i>SD</i>) (1.04)	3.86 (1.03)	3.77 (1.07)	3.75 (1.04)	3.81 (1.04)	
生存充実感	<i>M</i> 3.81 (<i>SD</i>) (1.08)	3.85 (0.98)	3.71 (1.01)	3.68 (1.07)	3.76 (1.04)	
存在価値感	<i>M</i> 3.92 (<i>SD</i>) (0.98)	4.02 (0.93)	3.85 (1.08)	3.86 (1.03)	3.91 (1.01)	
生きがい状態(合計)	<i>M</i> 3.85 (<i>SD</i>) (0.99)	3.87 (0.91)	3.75 (0.96)	3.75 (0.99)	3.80 (0.96)	

Table 4 「10点満点の生きがい感」の記述内容の出現回数による抽出語

抽出語	出現回数 ¹⁾	抽出語	出現回数 ¹⁾	抽出語	出現回数 ¹⁾
人生	234	生きがい	56	毎日	30
自分	199	幸せ	47	金銭	26
子供	167	出来る	46	自身	24
家族	158	楽しい	44	趣味	24
仕事	148	人	44	経済	23
生活	127	生きる	44	日々	23
感じる	96	子ども	43	毎日	23
思う	82	家庭	42	満足	23
充実	61	好き	39	満点	23
健康	60	必要	37	過ごす	22
お金	59	余裕	34	過ごせる	22
時間	59	今	31	不自由	20
成長	59	自由	30		

注1) 出現回数のカウントであるので、のべ回数であり、1人で2回以上がある。

注2) 出現回数が20回以上の抽出語を示す。

(234回), 「自分」(199回), 「子供」(167回), 「家族」(158回), 「仕事」(148回), 「生活」(127回)であった。次に, 「感じる」(96回), 「思う」(82回)と続くが, これらの2語は特徴のない述語であり, 10点満点

の生きがい感の特徴を有するものではなかった。その次は, 「充実」(61回), 「健康」(60回), 「お金」(59回), 「時間」(59回), 「成長」(59回)であった。

次に, 同様の意味をもつと考えられる語を

まとめる coding を行った (Table 5)。Table 5 には最終的に 20 人以上に出現した coding のみを記している。100 人以上に出現した coding は、「人生」(218 人)、「家

族」(191 人)、「できる」(190 人)、「自分」(182 人)、「子ども」(180 人)、「仕事」(146 人)、「お金」(136 人)、「生活」(117 人)、「感じる」(101 人)であった。抽出語と同

Table 5 「10点満点の生きがい感」の記述内容に対する coding と出現人数

coding 名	n ¹⁾	割合 ²⁾	coding 内容
*人生	218	(25%)	人生 or 生き方
*家族	191	(22%)	家族 or 家庭 or 家
*できる	190	(22%)	できる or 出来る or 可能
*自分	182	(21%)	自分 or 自身 or 自己
*子ども	180	(21%)	子ども or 子供 or こども or 子
*仕事	146	(17%)	仕事 or 働く or キャリア or 職業
*お金	136	(16%)	お金 or 金銭 or 経済 or 収入 or 家計 or 給与 or 給料 or 金 or 裕福
*生活	117	(14%)	生活 or 暮らし or 私生活
*感じる	101	(12%)	感じる or 実感
*毎日	75	(9%)	毎日 or 日々
*健康	74	(9%)	健康 or 病気 or 健やか or 元気
*楽しい	71	(8%)	楽しい or 楽しむ or 楽しみ or 楽しめる or たのしい
*過ごす	69	(8%)	過ごす or 過ごせる or 送れる or 送る
*充実	60	(7%)	充実
*生きがい	57	(7%)	生きがい or 生き甲斐
*成長	57	(7%)	成長 or 大きく
*不安	55	(6%)	不安 or ストレス or 悩み or 心配 or 困る
*時間	55	(6%)	時間
*わかる	53	(6%)	わかる or 分かる
*やる	47	(5%)	やる
*人	46	(5%)	人 or 人間
*余裕	45	(5%)	余裕 or ゆとり or 余暇
*幸せ	45	(5%)	幸せ or 幸福
*生きる	43	(5%)	生きる
*子育て	40	(5%)	子育て or 育てる or 育つ or 育児
*好き	40	(5%)	好き or 大好き
*今	37	(4%)	今 or 現在 or いま
*必要	36	(4%)	必要
*満足	35	(4%)	満足 or 満たす or 満ち足りる
*趣味	32	(4%)	趣味 or 旅行
*良い	31	(4%)	よい or 良い
*社会	30	(3%)	社会 or 環境
*不自由	29	(3%)	不自由
*自由	29	(3%)	自由
*暮らせる	28	(3%)	暮らせる or 暮らす
*夫・妻	28	(3%)	夫 or 主人 or 旦那 or 妻 or 嫁
*目標	27	(3%)	目標 or 目的 or 夢
*笑顔	27	(3%)	笑顔 or 笑う
*努力	23	(3%)	努力 or 一生懸命 or 苦勞 or 全力
*満点	22	(3%)	満点
*一緒	20	(2%)	一緒 or 共に or 共有

注 1) n は、出現人数のカウントであり、1 人で 2 回以上のカウントはしていない。

注 2) 割合は、全協力者 859 人に対する n (出現人数) の割合を示す。

注 3) 出現人数が 20 人以上の coding を示す。

様、10点満点の生きがい感として、人生、家族、自分、子ども、仕事、生活の coding が多く、できる、お金の coding が新たに加わった。その後は、「毎日」(75人)、「健康」(74人)、「楽しい」(71人)、「過ごす」(69人)、「充実」(60人)、「生きがい」(57人)、「成長」(57人)と続く。生きがい感について記述を求めたので、質問にある言葉である生きがいが入っている。

そして、20人以上に出現している coding について、ward 法による階層的クラスター分析を行い、デンドログラムを作成した (Figure 2)。その結果、6つのクラスターに分類され、各クラスターが解釈可能であった。「お金」「生活」「時間」などが分類された第1クラスター「CL1 経済生活」、 「家族」「仕事」「毎日」「楽しい」などが分類された第2クラスター「CL2 毎日充実」、 「子ども」「成長」などが分類された第3クラスター「CL3 子ども成長」、 「健康」「子育て」「満足」「暮らせる」などが分類された第4クラスター「CL4 健康生活」、 「人」「社会」「必要」「目標」などが分類された第5クラスター「CL5 社会生活」、 「人生」「自分」「できる」などが分類された第6クラスター「CL6 自分の人生実現」であった。

このように、乳幼児をもつ親が10点満点の生きがい感とするものは、これらの6クラスターに属している。4群全体のクラスターの出現人数とその出現比率をみると (Table 6)、「CL6 自分の人生実現」が53%と最も多く、次に「CL2 毎日充実」44%、そして、「CL5 社会生活」33%、「CL1 経済生活」32%、「CL4 健康生活」25%、「CL3 子ども成長」25%であった。

4群別の傾向 階層的クラスター分析により分類された6クラスターについて、記述を行った人数を性別と家族形態の4群別に集計を行った (Table 6)。4群のいずれの群でも、最も大きな割合を占めるのは「CL6 自分の人生実現」(46-60%)であり、次に「CL2 毎日充実」(41-50%)であった。

各クラスターについて、4群別に χ^2 検定を行い、有意だったクラスターの残差分析を行った。その結果、 χ^2 検定で有意となったクラスターは、「CL3 子ども成長」($\chi^2(3) = 8.3, p < .05$)と「CL4 健康生活」($\chi^2(3) = 9.1, p < .05$)と「CL6 自分の人生実現」($\chi^2(3) = 13.4, p < .01$)であった。「CL3 子ども成長」は専業・母親で最も多く(31%、調整済み残差=2.3, $p < .05$)、共働き母親と共働き父親はともに25%で、専業・父親で最も少なかった(19%、調整済み残差=-2.4, $p < .05$)。「CL4 健康生活」は母親で多く(29-30%)、共働き父親は少なく(23%)、専業・父親は最も少なかった(19%、調整済み残差=-2.4, $p < .05$)。「CL6 自分の人生実現」は専業・母親が最も多く(60%、調整済み残差=2.5, $p < .05$)、次に共働き母親で(57%)、父親は少なかった(共働き父親:46%、調整済み残差=-2.3, $p < .05$; 専業・父親:46%、調整済み残差=-2.0, $p < .05$)。すなわち、専業・母親は他3群に比べると、「CL3 子ども成長」と「CL6 自分の人生実現」を10点満点の生きがい感とする者の割合が多く、父親は母親より「CL6 自分の人生実現」を10点満点の生きがい感とする者の割合が少なく、専業・父親は「CL4 健康生活」を10点満点の生きがい感とする者の割合が少なかった。

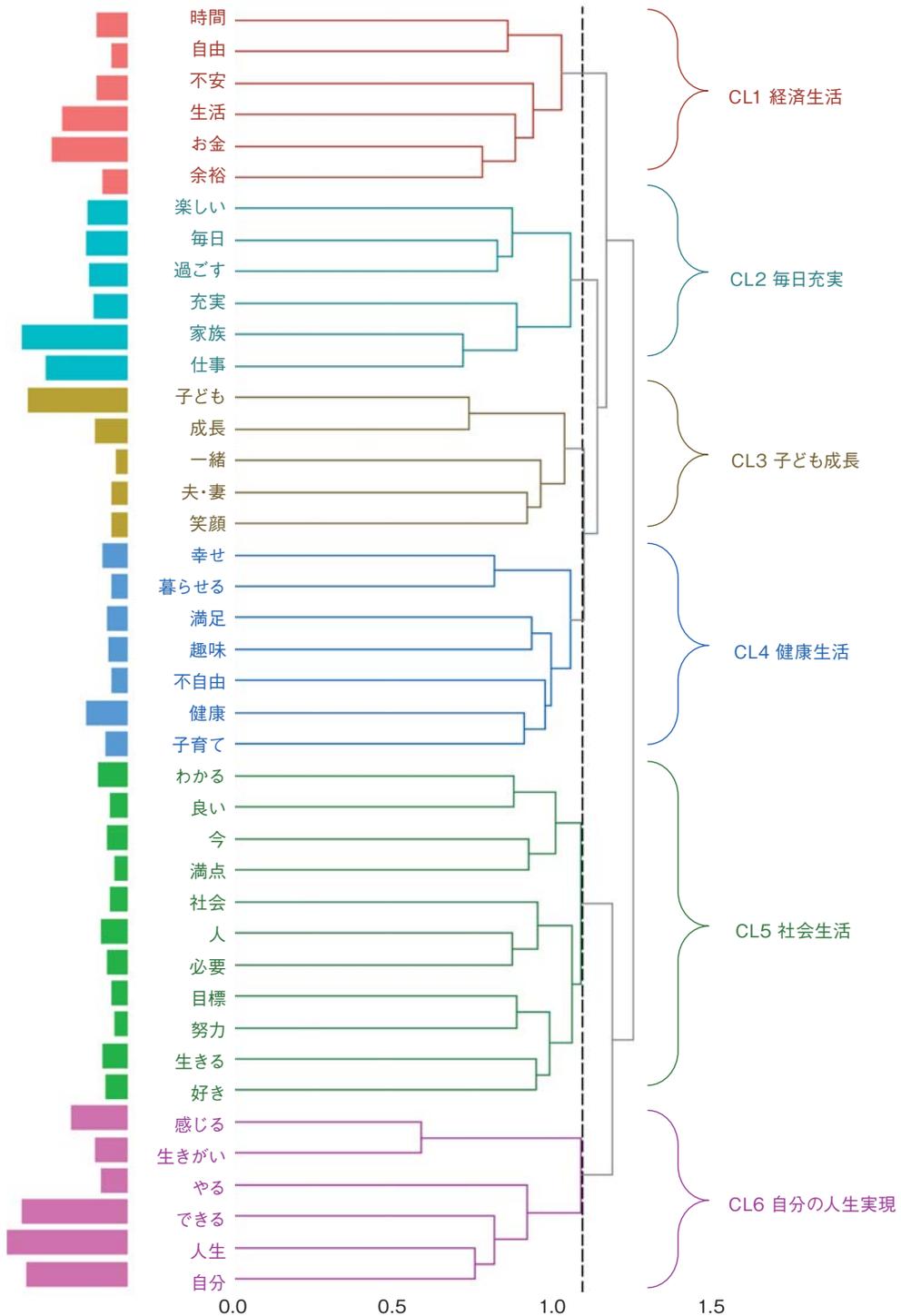


Figure 2 「10点満点の生きがい感」の coding に対する階層的クラスター分析 (ward 法) によるデンドログラム

注 1) 20 人以上に出現している coding について階層的クラスター分析 (ward 法) を行った。

Table 6 「10点満点の生きがい感」の各クラスターにおける4群別の出現人数

	共働き父親	専業・父親	共働き母親	専業・母親	全体	$\chi^2(3)^{1)}$
CL1 経済生活						
<i>n</i>	70	60	84	62	276	3.3
割合(<i>n</i> /各群の人数) ²⁾	(31%)	(30%)	(37%)	(30%)	(32%)	
調整済み残差 ³⁾	-0.3	-0.6	1.8	-0.9		
CL2 毎日充実						
<i>n</i>	94	82	94	105	375	4.9
割合(<i>n</i> /各群の人数) ²⁾	(42%)	(41%)	(41%)	(50%)	(44%)	
調整済み残差 ³⁾	-0.6	-0.7	-0.9	2.2*		
CL3 子ども成長						
<i>n</i>	56	37	58	65	216	8.3*
割合(<i>n</i> /各群の人数) ²⁾	(25%)	(19%)	(25%)	(31%)	(25%)	
調整済み残差 ³⁾	-0.1	-2.4*	0.1	2.3*		
CL4 健康生活						
<i>n</i>	51	37	68	60	216	9.1*
割合(<i>n</i> /各群の人数) ²⁾	(23%)	(19%)	(30%)	(29%)	(25%)	
調整済み残差 ³⁾	-1.0	-2.4*	1.9	1.4		
CL5 社会生活						
<i>n</i>	69	59	83	75	286	3.3
割合(<i>n</i> /各群の人数) ²⁾	(31%)	(30%)	(36%)	(36%)	(33%)	
調整済み残差 ³⁾	-0.9	-1.2	1.2	0.9		
CL6 自分の人生実現						
<i>n</i>	103	92	131	125	451	13.4**
割合(<i>n</i> /各群の人数) ²⁾	(46%)	(46%)	(57%)	(60%)	(53%)	
調整済み残差 ³⁾	-2.3*	-2.0*	1.7	2.5*		

** $p < .01$, * $p < .05$

注1) $\chi^2(3)$ は、各クラスターにおける4群での *n* (出現人数) の比率の有意差を検定している。

注2) 割合は、4群のそれぞれの人数に対する各クラスターの *n* (出現人数) の割合を示す。

注3) 調整済み残差は、各クラスターにおける4群での調整済み残差を示す。

考 察

現在と子ども誕生前の生きがい感

本研究での現在の生きがい感は、性別と家族形態による有意差はみられず、7.46-7.69であった (Table 1)。未婚者や夫婦のみの世帯を含んだ一般的な30代における現在の生きがい感は、男性5.59、女性5.92であった (熊野, 2013)。すなわち、一般的な30代より、乳幼児をもつ親の現在の生きがい感が高くなっていると考えられる。子どものいる者は、幸福度は高くなるとの結果があり (白

石・白石, 2010)、生きがい感も同様であると考えられる。

子ども誕生前の生きがい感は、専業・母親は共働き母親より有意に低かったが (Table 1)、現在の生きがい感は4群に統計的有意差がみられなかったため、専業・母親は子ども誕生後の生きがい感の上昇が最も大きく、共働き母親は子ども誕生後の生きがい感の上昇が最も小さいと考えられる。

4群における生きがい感の変化

子ども誕生前から現在の生きがい感への変化の分析では、共働き母親が、誕生前より現

在の生きがい感が低下する者の割合が4群の中で最も大きかった (Table 2)。共働き母親では、子ども誕生前と比較して現在は、子育てのため就労に制限ができて、仕事をうまくこなせないという焦りや、子育てを十分にできないという負い目を感じたり、仕事と子育ての両立に葛藤を感じたり、身体的・精神的疲労が高まる者が多いため、子ども誕生により生きがい感が低下すると考えられる。一方、専業・母親が誕生前より現在の生きがい感が上昇する者の割合が4群の中で最も大きかった (Table 2)。専業・母親では、子どもの誕生により、子育てが生活に加わり、夫とのみの家庭生活よりも子育てを楽しむことで様々な生きがい感を得られるから、現在の生きがい感が上昇すると考えられる。

生きがい状態と生きがいプロセス

未婚者や夫婦のみの世帯を含んだ一般的な30代における生きがい状態尺度の各下位尺度得点と合計得点では、男女差はみられず、人生肯定感 3.24、人生の意味感 3.35、生存充実感 3.33、存在価値感 3.47、生きがい状態 (合計) 3.35 であった (熊野, 2013)。これらの一般的な30代のデータと比べると、乳幼児のいる者は、生きがい状態の各下位尺度とも 0.4-0.5 ほど高く、生きがい状態が高い傾向を示していると考えられる。現在の生きがい感は4群に差がみられず、生きがい状態が4群に差がみられないことに一致した結果である。また、一般的な30代より本研究の乳幼児をもつ者は生きがい感も生きがい状態も高くなっており、同様の傾向を示している。

一般的な30代における生きがいプロセス

尺度の各下位尺度得点は、未来の目標意識とポジティブ状況の没頭で男女差がみられ、過去の意味づけ 4.11 (男性 4.08, 女性 4.14)、未来の目標意識 3.42 (男性 3.53, 女性 3.31)、ポジティブ状況の没頭 3.66 (男性 3.79, 女性 3.53)、ネガティブ状況の受容 4.01 (男性 4.01, 女性 4.02)、ネガティブ状況の対処 3.88 (男性 3.86, 女性 3.90) であった (熊野, 2013)。これらの一般的な30代のデータと比べると、乳幼児のいる父母は、過去の意味づけと未来の目標意識で一般的な30代の男女より 0.3-0.5 高く、乳幼児のいる父親のみがポジティブ状況の没頭、ネガティブ状況の受容、ネガティブ状況の対処で一般的な30代の男性より 0.2-0.3 高かった。

子ども誕生後の生きがい感変化についての生きがいプロセスからの検討

専業・母親で生きがい感が上昇する者の割合が他の3群より大きい理由と、共働き母親で生きがい感が低下する者の割合が他の3群より大きい理由を生きがいプロセスの観点から検討する。そのために、専業・母親と共働き母親のそれぞれについて、専業・母親の生きがい感上昇群 (129名)、変化なし群 (61名)、低下群 (19名) の3群と、共働き母親の生きがい感上昇群 (109名)、変化なし群 (86名)、低下群 (33名) の3群における生きがいプロセスの各下位尺度得点を比較した。

専業・母親では、生きがいプロセス尺度の5種の下位尺度のうち過去の意味づけのみが、生きがい感上昇群・変化なし群・低下群の一要因分散分析により有意であり (F

(2,206) = 3.3, $p < .05$, $\eta^2 = .031$), Tukey の HSD 検定により上昇群は低下群と比べ有意に高かった(生きがい感上昇群 4.37, 変化なし群 4.28, 低下群 3.75, $p < .05$)。すなわち, 専業主婦の生きがい感上昇群は, 低下群に比べ, 過去の出来事に意味づけることが高かったと考えられる。専業主婦は子ども誕生前には日常生活の中で時間的見通しを持ち難かったが, 子どもの誕生により, 子どもの成長過程の中で, 過去の各種出来事を人生へ意味づける程度が高くなったことで子ども誕生後の生きがい感が高まる者の割合が大きくなっていると考えられる。

共働き母親では, 生きがいプロセス尺度の 5 種の下位尺度のうち, ネガティブ状況の受容, ネガティブ状況の対処, ポジティブ状況の没頭が, 生きがい感上昇群・変化なし群・低下群の一要因分散分析により有意であった(ネガティブ状況の受容: $F(2,225) = 7.1$, $p < .001$, $\eta^2 = .060$; ネガティブ状況の対処: $F(2,225) = 5.3$, $p < .01$, $\eta^2 = .045$; ポジティブ状況の没頭: $F(2,225) = 5.4$, $p < .01$, $\eta^2 = .046$)。ネガティブ状況の受容は, Tukey の HSD 検定により生きがい感低下群は上昇群や変化なし群と比べて有意に低かった(生きがい感上昇群 4.11, 変化なし群 4.29, 低下群 3.64, $p < .05$)。ネガティブ状況の対処は, Tukey の HSD 検定により, 生きがい感低下群は上昇群や変化なし群と比べ有意に低かった(生きがい感上昇群 4.18, 変化なし群 4.25, 低下群 3.68, $p < .05$)。ポジティブ状況の没頭は, Tukey の HSD 検定により, 生きがい感低下群は変化なし群と比べ有意に低かった(生きがい感上昇群 3.62, 変化なし群 3.86, 低下群 3.17, $p < .05$)。共働

き母親は仕事も子育ても十分な時間をかけることができず, 仕事への焦りや子育てへの負い目を感じ, 仕事と子育ての両立を困難であると感じているネガティブ状況に陥りやすいと考えられる。そして, 共働き母親の生きがい感低下群は, このネガティブ状況を受容して対処する程度が低く, ポジティブな状況に没頭する程度が低かったため, 子ども誕生後の生きがい感が低下する者の割合が大きくなっていると考えられる。

10 点満点の生きがい感

100 人以上に出現した coding である人生, 家族, できる, 自分, 子ども, 仕事, お金, 生活が 10 点満点の生きがい感に重要な要素と考えられる。抽出語では上位に入っていなかったが, 収入, 経済, 給料などさまざまな表現をとっていた「お金」が coding では上位に入ってきて, 収入の要素は多くの人考える要素であることが認められた。また, 「できる」も, できる, 出来る, 可能をまとめることにより, 上位に入ってきており, できることであるということが 10 点満点の生きがい感に重要な要素と考えられる。その次に多い coding である毎日, 健康, 楽しい, 過ごす, 充実, 成長も 10 点満点の生きがい感に重要な要素と考えられる。Table 5 のその他の人数の少ない coding については, 10 点満点の生きがい感に個人的な特徴を付与する要素と考えられる。

乳幼児のいる親全体の 10 点満点の生きがい感の coding に対する階層的クラスター分析の結果, 「CL3 子ども成長」が 25% にみられるが, 「CL6 自分の人生実現」53%, 「CL2 毎日充実」44% が多かった。すなわ

ち、子どもは生きがい対象として重要ではあるが、「CL3 子ども成長」だけで10点満点の生きがい感を説明できるわけではないと考えられる。

子ども誕生後の生きがい感変化についての10点満点の生きがい感からの検討

4群の各群においても、10点満点の生きがい感において、「CL6 自分の人生実現」(46-60%)、「CL2 毎日充実」(41-50%)の占める割合が大きく、「CL3 子ども成長」(19-31%)以外での自分の人生の実現や毎日の充実を求めていると考えられる。これが、共働き母親で子ども誕生後の生きがい感が低下する者の割合が大きいことと関係すると考えられる。共働き母親は、子育てと仕事に追われて、自分の時間を持ったり、充実感を感じたりすることが難しく、10点満点の生きがい感である「CL6 自分の人生実現」や「CL2 毎日充実」が満たされにくい状況にあると考えられる。また、共働き母親は、有意差はみられていないが、「CL1 経済生活」の割合が4群の中で大きい傾向であることに関連している可能性が考えられる。共働き母親は経済生活を10点満点の生きがい感と考えていても、子ども誕生により産休・育休の取得や労働時間の短縮やキャリア形成の機会の喪失など働き方の制約が生じ、収入が減少することも一因となっている可能性がある。

一方、専業・母親は子ども誕生により生きがい感が上昇する者の割合が大きいことが明らかになった。これには、専業・母親は、他の3群より「CL3 子ども成長」を10点満点の生きがい感としてあげる者の割合が大き

く、子ども誕生後に生きがい感が高まる者の割合が大きいことが関連していると考えられる。

父親については、母親と同様「CL6 自分の人生実現」の割合が最も大きいですが、母親に比べると1割程度小さくなっており、母親ほど自分の人生実現を10点満点の生きがい感と考えていないと考えられる。また、専業・父親において、他3群より「CL3 子ども成長」「CL4 健康生活」の割合が小さかった。専業・父親は子ども成長を10点満点の生きがい感とする者の割合が最も小さかったが、共働き父親や共働き母親より、子ども誕生後の生きがい感が上昇する者の割合が大きかった。これは、専業・父親においては、専業・母親が子育てを中心となって担うことにより、子育てのストレスが少なく、子ども成長を10点満点の生きがい感と考えていなくても、子育ての楽しい部分を享受しやすいためと考えられる。

結論

専業・母親は子ども誕生後に生きがい感が高まる者の割合が最も大きく、共働き母親は子ども誕生後に生きがい感が低下する者の割合が最も大きかった。このことについて、10点満点の生きがい感と生きがいプロセスの観点から考察したところ、以下のように考えられた。

専業・母親については、(a) 専業・母親は10点満点の生きがい感として子ども成長の割合が大きいことと、(b) 専業・母親の生きがい感上昇群は、子どもの成長過程の中で、過去の出来事を人生へ意味づける程度が高いことと関係していると考えられる。

共働き母親については、(c) 共働き母親は、子育てと仕事に追われて、10点満点の生きがい感で主要な要素である自分の人生実現や毎日充実が満たされにくいことと、(d) 共働き母親の生きがい感低下群は、子育てと仕事の両立の困難なネガティブ状況を受容し対処する程度が低く、ポジティブな状況に没頭する程度が低いことと関係していると考えられる。

引用文献

- ベネッセ教育総合研究所 (2015). 第3回乳幼児の父親についての調査 速報版 (http://berd.benesse.jp/up_images/research/Father_03-ALL2.pdf) (2017年9月15日)
- 福丸由佳 (2000). 共働き世帯の夫婦における多重役割と抑うつ度との関連 家族心理学研究, **14**, 151-162.
- 樋口耕一 (2014). 社会調査のための計量テキスト分析：内容分析の継承と発展を目指して ナカニシヤ出版
- 神谷美恵子 (1966). 生きがいについて みすず書房
- 柏木恵子・永久ひさ子 (1999). 女性における子どもの価値—今、なぜ子を産むか— 教育心理学研究, **47**, 170-179.
- 厚生労働省 (2009). 子育て期の男女への仕事と子育ての両立に関するアンケート調査結果について (<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2009/09/h0929-1.html>) (2017年9月15日)
- 熊野道子 (2012). 生きがい形成の心理学 風間書房
- 熊野道子 (2013). 生きがい形成モデルの測定尺度の作成—生きがいプロセス尺度と生きがい状態尺度— 教育研究, **39**, 1-11.
- 熊野道子 (2017). 乳幼児をもつ親の育児感情と自分の役割配分と幸福感の関連 *Journal of Health Psychology Research*, **29** (2), 45-52.
- 百瀬 良 (2009). 専業母親の「個」として生

きる志向—自尊感情との関連— 家族心理学研究, **23**(1), 23-35.

永久ひさ子・柏木恵子 (2000). 母親の個人化と子どもの価値—女性の高学歴化、有職化の視点から— 家族心理学研究, **14**, 139-150.

内閣府 (2005). 平成17年版国民生活白書「子育て世代の意識と生活」(http://warp.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/9990748/www5.cao.go.jp/seikatsu/whitepaper/h17/10_pdf/01_honpen/index.html) (2017年9月15日)

小野田奈穂 (2013). 育児期女性の「個人としての自分」と育児ストレスとの関連—理想と現実のギャップからの検討— 家族心理学研究, **27**, 123-136.

白石小百合・白石 賢 (2010). ワーク・ライフ・バランスと女性の幸福度 大竹文雄・白石小百合・筒井義朗 (編著), 日本の幸福度 (pp.237-261). 東京：日本評論社.

付記

本研究は、平成23-25年度日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究C, 課題番号23530878)の助成を受けた。なお、本研究の一部は日本心理学会第81回大会(2017)で発表された。